

No. 67

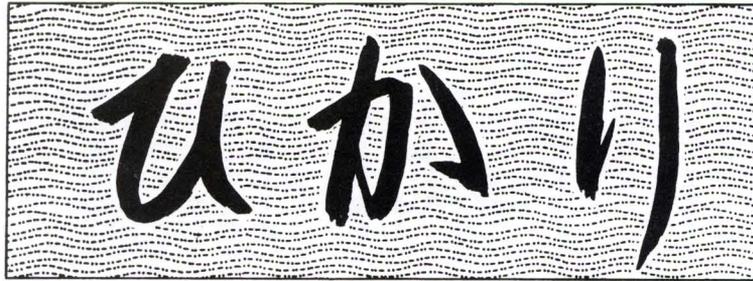
2005年(平成17年)11月1日

発行

浄土真宗本願寺派
和歌山教区日高組

責任者

鈴木悟峰



ナンマンダブツ
姿、形は見えねども
言葉で知らず弥陀の名号
ナムアマミダブツ

妙好人 浅原才市翁



日高組納骨団体参拝(於 本願寺 飛雲閣)

阿弥陀経に聞く

—— 十大弟子 阿難陀 ——

阿難陀はおシャカ様の説法をよく聞き、記憶していたので多聞第一といわれます。

阿難陀は、すがたかたちも勝れていて心優しい人でした。おシャカ様の晩年から入滅までの二十五年間、片時も離れず仕えていました。

托鉢に出た阿難陀が水をブクリティという娘に求めました。娘は阿難陀に恋をしました。娘の母は部族に伝わる呪術を得意とする母に、阿難陀に呪術を用いて結婚したいと告げました。母は、阿難陀のような方には呪術は効かないと断りましたが、娘のたつての希望により呪術を使いました。

修行中にもかかわらず、阿難陀は突然娘の住む村の方向に歩き出しました。途中で正気に戻り、おシャカ様に魔力のとけるようにしてもらいました。

娘は母に再び呪術をせがみましたが、母は拒みませんでした。

阿難陀が托鉢に出たとき、娘は阿難陀を見つけて人々に「あの方は私の夫です」といい、あとを連れ回しました。ストーカーです。困った阿難陀はおシャカ様に相談しました。

おシャカ様は娘を呼んで「阿難陀と結婚したいか」と問われ、まずは阿難陀と同じ姿になりなさいと比丘尼にしました。さらに「阿難陀のどこがよいか」と尋ねられました。娘は「目も鼻も耳もすべていいのです」と。おシャカ様は「目には涙、鼻には鼻水、耳には耳くそ、身体には大小便が詰まっている。そのどこがいいのか」と尋ねられました。

さすがに娘は阿難陀を追いかけていたことを恥し、修行を積み、聖者になりました。

(永原智行)

法話 死なずにまいる

「死」が避けては通れない道であることは、頭の中では理解できております。しかし、私が死んでゆかねばならないこと、「死」を考えたり、死んだ後のことを考えるのはまだまだ先のことであると先送りしてしまっています。

仏法を聞かせて頂きますと、阿弥陀さまのおはたらきが親ごころであることに気づかされます。たとえ苦しみ悩み悲しんでいる我が子を見て、親はどれだけ苦しみ悩んでいることでしょうか。

小学五年生の長女が、ある朝登校中に下を向いてしよぼしよぼと歩いていました。何か嫌なことでもあったんかと、車で徐行しながら注意深く眺めておりました、急に立ち止まり、当たり散らすようなそぶりで見だしたのです。

夕方、そのことを妻に話し、家庭内のことなのか、友達とのことなのか、とにかく心配だが、しばらくは様子を見ようということになりました。

その後は何事もなく普段の生活をしておりますが、娘の意外な一面に驚き、そしていつも一緒に生活しているが、些細なことに気づいてやれなかったの思いから、今まで以上に長女を

高僧和讃に

生死の苦海ほとりなし
久しく沈めるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ
のせて必ずわたしける
と詠まれています。

阿弥陀さまのおはたらきは、苦悩の海に沈んでいる私に、「上がっておいで」と言っても上がることができないことを見抜いておられ、苦悩の海に手をさしおべて、迷っている私をすくいとって下さるのです。

そのはたらきは親ごころそのものです。頼みもしないのに、お願いもしないのに、必ずすくうぞとはたらいて下さるのです。

なぜならそれは私の親だからです。この私を「一子地」、一人っ子として見ていて下さっているからなのです。苦しみ悩む我が子と何と助けてやりたい親として当然の心境ではないでしょうか。

浄土真宗のご本尊は住立空(くう)中尊(ちゆう)と言われ、立像(たつざう)であります。

立つておられるのは、いつでも、どこでも、私と共にいます仏さま(南無阿弥陀仏)という意味です。阿弥陀さまはああしなさい、こうしなさいと私たちに注文や催促はしません。信心

があるから救いましょう、よう参つてくれるから助けてあげようとはおっしゃりません。

そのまんまの私を見抜いてのおはたらきです。いかなるものでも、どのようなことがあっても必ずすくいとって下さるのです。

では、阿弥陀さまのおはたらきは死んでからのことなのでしょう。いえいえ死んでから救われるではありません。

阿弥陀さまのおはたらき(ご本願)のいわれを聞いて慶ぶことを信心といいますが、そして阿弥陀さまのみ名を口に出して慶ぶことを称念(しょうねん)仏といえます。

生きている今こそ、阿弥陀さまの喚び声に目覚めることが大切であります。阿弥陀さまの喚び声を深く聞き、慶ぶ心が身に湧き出でて、自ずとお念仏申される私とならせていただくのです。

そして命尽きた時にはすぐにお浄土に生まれ、無上(むじやう)覚(かく)のさとりを得て、迷いのこの世界に還って阿弥陀さまのおはたらきをさせていただけるのです。

わたしあわせ
死なずにまいる
生きさせて
まいる浄土が
なむあみだぶつ

浅原才市

(楠原)

法悦クイズ

下の1~3の○内にあてはまる漢字を組み合わせて、親鸞聖人のご生涯を絵に描いたものの名称をお答え下さい。四幅の掛け軸にされたものが一般的であり、報恩講のとき、本堂の余間に掛けられ、聖人のご遺徳を讃嘆します。

1	2	3
○	○	箱
卷	歳	根
物	暮	駅
		○

官製ハガキにクイズの答え、住所、氏名、年齢、職業、電話番号、所属寺、御感想、御意見を明記の上、〒649-1221 日高郡日高町志賀3851 善宗寺内 組長事務所 までお送りください。

※抽選で10名の方に粗品を差し上げます。

※締め切り日 平成18年1月31日

※発表は次号

66号の正解は、『過去帳』でした。正解者の中から、次の方に粗品を進呈いたします。

- 円明寺 小林 照代 様
- 浄明寺 磯田 富三 様
- 浄明寺 川口アヤ子 様
- 念興寺 弓場トキエ 様
- 教専寺 島田 常美 様
- 教専寺 小谷かおり 様
- 蓮専寺 谷中 克巳 様
- 信行寺 塩田 廣一 様
- 覚性寺 尾崎 輝喜 様
- 長覚寺 山本 敏恵 様

伝童話 **ネズミのかじった服**

むかし、インドの王舎城の近くに、一人の男がすんでいました。

気のいい男でしたが、たいへん迷信ぶかく、すこしでもかわったことがあると、すぐにそのことをとりあげて、「これは、良いことのあるしるしだ」とか、「これは、悪いことのあるしるしだ」と、いいはしめるのでした。

ある日のことです。

男は、少し用事があって、となりの町へでかけることになりました。そこで、大切にしまっておいた、新しい服をとりだして、着ようとした。ところが、その服をひろげたとたん、男は、ぎょっとして顔いろをかえました。

大切にしまっておいた服が、ネズミにかじられて、あちこちやぶれているではありませんか。

「うーん、これは…。」

男は、うなりました。

うなりながら、ネズミにかじられた服を、じっとみつめました。

みつめればみつめるほど、これはたいへんなことだとおもいました。

『これは良いことのあるしるしだろうか、それとも、悪いことのあるしるしだろうか？』

ネズミのかじったあなを、目をさらのようにしながらながめました。

下からながめたり、上からながめたり、右からながめたり、左からながめたり、いろいろにながめました。ながめればながめるほど、男の顔はだんだんと、くもってきました。

『うーん、これは大変だ。この穴のあきようは、どうながめても悪いことのあるしるしだ。』

着ることはむりだし、かといってこれをこのまま、家のなかにおいておくと、かならずこの家にさいなみが、ふりかかってくるだろう…。」

男は、おそろしいものでもみるように、服をながめました。

『いっくも早く、この服を捨てないと、どんなさいなみがふりかかってくるかわからない…。』

男は、木の棒をとりだし、その先に服をひっかけました。手で、いつまでもさわっていても、病気になるってしまおうと、おもったのです。

男は、息子をよびました。そして、いいました。

「息子よ、この服は、さいなんをもたらず悪いしるしをもっている。すぐに、墓場まで、捨てにいつてきておくれ。」

「わかりました。お父さん。」

「捨てたあと、頭のとっぺんから、足のさきまでいい

ねいにあらいい、もどってくらんだぞ。」

そうしないと、からだに悪いことのあるしるしがあるのかもしれないからな。」

「わかりました。お父さん。」

息子は棒の先にひっかけた服をもって、墓場へやってきました。

すると、そこに一人のお坊さんが立っていました。息子は、もってきた服を棒といっしょに、ぼいとお坊さんが、息子にはなしかけました。

「それを、どうするのですか。」

「ごらんとおり、ここへ捨てるのです。」

「まあ新しい服ではありませんか。」

「服は新しいのですが、これはネズミのかじった服で、さいなみがふりかかると、捨ててこいといわれたのです。」

「さいなみが？」

「ネズミのかじった穴が、悪いことのあるしるしになっています。お父さんが、そういういました。」

お坊さんは、さらに話しかけました。

「捨ててしまうのですか。」

「息子は、棒と服を、ぼいと足でけとばしました。」

「その服を、わたしにいただけませんか。」

「いいですよ。しかし、さいな

いながふりかかってもしりませんよ。」

お坊さんは、にっこりわらいながら、捨てられた服をひろいあげました。

「ありがとう。」

服についた土をはらうと、にっこりわらったお坊さんは、歩きはじめました。

かえってきた息子から、そのことをきいた男は、

「そのお坊さんは、どちらのほうへおかえりになったんだ。」

と、あわててたずねました。

「王舎城のほうへ…。」

「ああ、たいへんなことだ。きつとお坊さんは、さいなみにあわれるだろう。そうなれば、わたしはみんなから非難される。」

男は、新しい服をお坊さんにほどこし、悪いしるしのある服を捨ててもらおうと、おもいました。

男は、王舎城のちかくをはしりまわって、お坊さん

をさがしました。

「お坊さま、ひろわれたその服をすぐにお捨てくださ

い。わたくしが、ここへ新しい服をもってまいりましたので、どうぞこれをおつかいください。そうでないと、たいへんなさいなみがふりかかります。」

お坊さんは、じっとそれを聞いていましたが、男が

いいおわるのをまわって、やさしくかたりかけました。

「わたしたちは、あなたが

いうそんなことに、とらわれはしないのだ。ネズミのかじった服のやぶれで、さいなみがくるとか、しあわせがくるとか、そんなことをいうことの方がおかしいとおもわないか？。わたしたちは、正しいお釈迦さまの教えをきき、その教えにしたがっている。あなたのように、なにかにつけ、悪いことのあるしるしだとか、良いことのあるしるしだとかいっているようでは、ほんとうに大切なものをみうしな

ってしまふぞ。そのような考えを捨てて、ほんとうの教えを聞かせてもらいなさい。」

男は、ぎくっとしました。

『大切なものを、みうしな

ってしまふ。』

ほとけのまなざし・草むらの小さなひとみ (本願寺出版社) より

